

Title	入江礼子氏報告「協働する保育を支える保育実践研究法」(<児童>における「総合人間学」の試み 研究会)
Author(s)	田澤, 薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.5, 2012.3 : 26-29
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3859
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

＜児童＞における「総合人間学」の試み 研究会 入江礼子氏報告「協働する保育を支える保育実践研究法」

田澤 薫

2012年1月7日、共立女子大学家政学部児童学科の入江礼子氏をお招きして研究会が開催された。

聖学院大学大学院人間福祉学研究科では、保育・教育の現場で子どもの傍らにあった実践者が学びやすい教育課程を整備する一環として、本年度から「保育・教育実践研究法」を開設したが、入江氏は本科目をご担当下さっている保育実践研究の第一人者である。

児童学科で子どもと共にある視座を得て現場に巣立った卒業生が課題に直面して大学院に戻ってくるときの手掛かりとなる「保育実践研究法」に、まずは私たちが学びたいという研究会の要望に応え、「協働する保育を支える保育実践研究法」というテーマでご報告下さった。以下は、その概要である。

保育者にとっての保育実践研究

「保育の場」について、保育者養成校では保育所・幼稚園を主に想定するのが一般的だが、家庭も含める考え方もある。「一日保育をすることは、厚い本を1冊読むことと同じだ」と言われる津守真先生は、「保育は、幼稚園でも保育所でも家庭でも同じだ。それだけ誰かが気持ちと時間、それから労力を与えなければ子どもは育たない」と主張されている。家庭は24時間保育で、夜があって病気があるのが家庭保育である。そこで子どもと向き合うことがどれほど大変なことか気づかされた。また、職業の保育者とは異なり、親はわが子の保育となると心が千々に乱れて冷静でいられないことも多い。そのため、実践研究の対象としては、もちろん家庭での保育も含んで考える。

1973年に大学を卒業し大学院に進学したと同時に、神奈川県鎌倉市のある民間幼稚園で5歳児クラスの担任となった。大学院の授業は、金曜日3時間目の津守真先生の科目のみだったので、クラ

スは主任の先生にお願いして、ちょうど1時半に幼稚園を出て子どもたちに「行ってきます」と言いながら通学した。このとき幼稚園と大学を行き来して保育記録を研究室のみんなで読み合ったことが、保育現場から研究を立ち上げたいという実践研究法の原点になっている。

その後、愛育養護学校（恩賜財団愛育会、東京都港区）の「家庭指導グループ」という障害を持った子どもの通園施設で保育者をした。さらに、母親になって家庭で子育てをする道を選び十数年家庭に在ったあと、恩師の勧めで研究と保育者養成の世界に入った。子育て中も、年に4回ぐらいは大学の津守研究室に子ども連れて出向き、卒業生が十数人集まって「遊びを見つめる」というテーマで保育記録の研究会を持ち続けていた。

保育実践研究とは

保育実践研究では、「記録」・「当事者性」・「協働」がキーワードになると考えられる。

「記録」は、様々な記録媒体がある中で、自分の手を使って書くメモの有効性が高い。

「当事者性」は、子どもと関わる当事者、保育の当事者の意である。研究目的の傍観者的な観察ではなく、子どもたちと一緒にしながら、そこに身体を投じたところ、生き抜いたところで拾ってこれた記録が研究の基になる。

「協働」については、「＜児童＞における「総合人間学」の試み研究」でも先に話題になった「子どもの領分」を保障する人との協働を模索していく視点を、研究するものが持ちたい。保育現場における保育者の協働と、児童学科のような養成校がどう協働して学生を育てていくのかという課題には重なる部分も多い。関連領域ではあっても学問研究とは乖離している実感を現場が持っているなかで、保育者自身が研究領域に発信してい

くことを考えていく必要がある。「現場に身を投げ込む」当事者の視座に立って取られた「記録」から、実践研究は始まる。

保育実践研究の手法

保育実践研究の方法論を学んだ当時の大学には、津守真先生、本田和子先生、また津守先生が特別講義でおよびになった河合隼雄先生がおられた。諸先生が、子どもという存在を前に保育や子どもをどう考えていこうかと模索し、やはり実証的な研究方法論では思うようには子どもに迫れないという感触をもたれ、試行錯誤されている様子に傍らで接することができた。先生方がご自分の新たなスタイルを生みだそうとされている時期だったためか、学生のことも同等に見ていただき、子どもに出会って関わって生活を紡ぎ出す人という意味ではみんな平等だ、誰の意見のほうが上とか下とかそういうことはないということが体に染みついた。

まだ手法を持たなかった学生時代から、面白いという思いのみで子どもと関わり、教育の対象というよりは一緒にいる存在という感覚をもって子どもに向き合い、考えるなかで、子どもの言動に対して「ああ、そうだったのね」と分かった思いを持つことを繰り返した。

研究グループで幼稚園での参与観察を行い、



保育実践研究について語る入江礼子氏

思ったことを自由に記しその記録を持ち寄って検討会を行うと、詩の形式で発表する研究者もいる。そこから、保育研究は形式的な決まりごとではなく、その場面が浮き上がってくるような記録だけでなくもう少し先に行くような奥行きがあってもよいことを学んだ。

例えば、ある男の子は毎日水を流す。砂場ではなく、普通の地面に向けて傾斜のある板からジャーッと流すといつの間にか道ができる。それを3カ月ぐらい続けたときに、その子が、キラッと光る石を見つけて、「宝物があった」って言って、それでその子の水遊びは終了した。光る石を本当にその人が求めていたかはわからないが、毎日水を出して、幼稚園から外にジャージャー水が流れていくのに付き合うと、何か一生懸命やって何かを求めてたんだっていうことがわかり、「あ、子どもって、そうなんだな」と思われた。

保育は「ひらがな」の世界であり、概念化するよりは、そこで紡がれた物語を語ることが記録のもつイメージである。その物語が、また、ある人を触発して、子どもとの次の物語につながっていく。そうした世界のことを、客観性を求められる研究として確立するには、もう一段階必要になる。昨今、質的研究がはやっているが、保育実践研究においては違和感を拭えない。保育にそれを持ってきたっていいのかという思いが残る。しかし、質的研究の手法によっていないと、研究論文としては認められないことが多いのは現実だろう。そこを保育実践の研究領域がどう乗り越えていくか考えると、例えば、その現場を共有する保育実践者で話し合いの場をもち、今回はこんな感じだったと浮かび上がってくるもの—ビデオのように一方向からではなく多角的にいろんなところから浮かび上がってきた参画者の共有イメージとして客観性が認められるもの—を写し取る手法が考えられるだろう。

保育は哲学に近い部分があり、いわゆる科学的研究とは異なり生き方が反映されるものだから、

それを研究の遡上に乗せられるのかは議論が尽きない。一例をあげれば、倉橋惣三の詩は一つの表現方法の例として大変分かりやすい。倉橋の詩から考えて実践が生まれているということは、やはり普遍性につながっていると考えられるだろう。

保護者の視点、保育者の視点

一人の子どもについて、保護者の見ている面と教師の見ている面が異なることは珍しくない。子どもにとっては、その両方が両方とも真の姿なのであるが、保育者がそのことを認められるようになるのに意外と時間がかかる。

前任校では教員として10年勤めたうちの後半5年間は、附属幼稚園長を兼任した。ちょうど園児が減少し3歳児クラスは6名のみという状況の中で、立て直しに取り組んだ。

子どもが「ああ、楽しかった」と感じる幼稚園であることが一番大事だと考えて、改革に着手した。一日の日課が細かく決まっていたものを外したところ、当初は次に何をしたらよいか分からず子どもたちが困ってしまった。しかし、そのうちに伸びやかに遊ぶ子も出てきた。制服があって、白いハイソックスを履いているが、着替えももどかしくそのまま遊びに出してしまうとハイソックスが黒くなる。そうしたら、次の月の保護者会では、「ハイソックスが黒くなっているんですけど。洗っても汚れが取れません。どうして白いまま帰してくれないんですか」と指摘された。車で送迎する家庭からは、「この頃うちの子は帰りに車で寝てしまうんです。そんなに疲れさせないでください」と言われた。遊んで「ああ、楽しかった」と思う子どもの視点を、保護者が共有しにくい場面も少なくない。

そこで考え至ったのは、幼児教育における計画ということであった。幼児教育の計画は、子どもの姿をよく見て立案するが、計画はとりあえず持ってそれは崩すためにあるというふうに、位置づけも難しい。保育観、子どもを見る目が育って



入江礼子氏の報告を受けて、活発な議論が展開された。

いないと、保育計画を生かした保育を行うのも難しい。子どもに寄り添うことと計画の間のジレンマは消えない。若い保育者が子どもに寄り添うことを放棄しないで、計画も立てられることをどう支援し得るのかは課された大きい課題だと考える。

いわゆる保育研究と保育実践研究の谷間

当事者である保育者が立ち上げる保育実践研究というのにはどういう可能性があるのか。保育学周辺の関連学問、例えば心理学等の研究者が立ち上げる保育研究とどこが違ってどう補完し合ってやっていくものなのか。

実践研究は記録にこだわりたい。保育観察で保育の場に入る場合と、自分が本当に入った場合ではやっぱり見えてくるものが違うし、本当にその両方の視点が大切である。

保育の中に参画して一緒に動く、まさに当事者になるので、何が何だか分からなくなり全体が見渡せないというリスクはある。客観的な立ち位置を保っていれば、いろいろなことが見えて発見が多いことも確かである。しかし、やはり実践の場に飛び込んで、そこでどういう自分なのかという自己覚知に向き合うことなしに、観察だけで保育者を育てることには危惧がある。

そこで、観察も行うが、必ず現場に入って自ら動いたところから何か立ち上げてみることを大事

にしたいと思っている。見たものを記録して、「あの子、何考えてこうしているんだろう」と想像力を駆使しながら、そばにいて体が触れるあたりで考えてほしい。それがあれば、想像力も、もちろんいろんな知見も含めてもっと生きてくるものになるだろう。

現任校で取り組んでいる、子育て支援の親子グループの活動では、保育学・発達心理学・人間関係学・音楽学・美術学の教員と学生たちとで、地域の1歳半から3歳の子どもと親子で遊ぶ場を提供する活動を行っている。明確な計画を先行させるのではなく、様子を見ながら、子どもに合わせながらいろいろ生み出していく。専門領域の異なる教員が協働できるか、教員の模索する姿を学生たちに曝しながら実施している。現在では、子どもが今何したくてこんなことと思っているよね、じゃあ、何が必要だろう、それにはどういう計画が必要だろうと、学生が環境図の入った指導計画を立てられるようになってきている。この活動のなかで、教員同士が同じ子どものことを共に話せたことの意味は大きかった。専門領域が異なると言葉が違うけれども、言っていることは同じだったと気づかされることもあった。保育における協働性の試みである。

直接に子どもと関わる実践を通して、大人は子どもの側の「筋」としてのストーリーに出会い、幾度も反芻する中で初めてそこにある物語に気づかされることがある。それを言語化して、子どもの物語の側から説明することで、広く「子ども」一般の事情に大人が学ぶことになり得る、と期待する活動が実践研究なのではないだろうか。児童学の発想が凝縮されている研究方法論に触れ、自由で活発な発言は尽きることがなかった。児童学科の様々な専門領域の教員が集ったが、それぞれの専門の立場からの議論が見事に本日の課題に絡んでいたことは大変に興味深い。

(文責：たざわ・かおる 聖学院大学児童学科教授)